



写真2[前頁上]-「幻」の石橋スピアン・プラプトスの全景 シムリアップから国道6号線を60kmほど東にいったあたりにある 乾季でも片道2時間ほどかかる
 写真3[左上]-親柱の位置には、水をため財産を守るといわれるコブラの頭が4つ残されている お線香や灯明を上げる人もいる
 写真4[右上]-せり出し工法の開口部 スパンは狭く、スリット状である
 写真5[左下]-橋を通る牛車 国道といっても舗装されていない田舎道だ 雨季になると路面が滑り通行が難しくなる
 写真6[右下]-シムリアップ市街 アンコール遺跡観光の母都市として栄えた 古い街並みが魅力

アンコール王朝の「幻」の石橋 スピアン・プラプトス

Spean Praptos - A Forgotten Stone Bridge of Angkor Empire

山田 耕治

YAMADA Koji

日本工営株式会社/事業企画室
室長代理



今から約800年前、東南アジアに大きな勢力を誇るアンコール王朝があった。その勢力は、東はマレーシア、インドネシア、北はラオス、西はミャンマー(ビルマ)やタイにまで及んだという。その巨大王朝の首都が、現在のカンボジアにあるアンコール遺跡群である。

アンコール遺跡の一角にスピアン・トマと呼ばれる石橋の遺構が残されている。石橋はシムリアップ川に架かっていたが、後に流路が動き、今では緑に包まれた低地に忽然と遺構が現れる。遺跡群からも近く、目にされた人も少なくないだろう(写真1)。

実は、さらに雄大な姿をもち、また今日も使用されている石橋がある。これまで日本ではほとんど紹介されていない、「幻の石橋」である。遺跡群から東に約60km程、カンボン・クディという小さい町にアンコール時代の石橋・スピアン・プラプトスがある(写真2~4)。12世紀の後半から13世紀初頭にかけて、ジャヤヴァルマンVII世



写真1 - スピアン・トマ アンコール遺跡群の一角(アンコール・トムの東大門の東側)にある、一部が損壊した石橋 規模は小さい

王(在位1181 - 1201)が建造させたものと言われる。この時代の石橋で現存するものとしては、東南アジアでも最大級のものだ。チカレン川にかかるこの石橋は、全長87m、石造の橋脚は20を数え、使われた材料(砂岩とラテライト)は有名なアンコールワットの材料と同じものである。



アンコール王朝は帝国の各地を結ぶ道路網を持っていた。アンコールを中心に放射状に道路が伸び、その総延長は数百kmに及ぶ。スピアン・プラプトスの石橋は、アンコールから南東に方面に伸びる広域の幹線道路に架かる橋であった。この道路はアンコール遺跡にある多数の石造建造物の材料となった切石の輸送路としても活躍した。

この石橋は現在も国道6号線が通る現役の橋である。自動車や乗合バスに混じり、牛や水牛に引かれた荷車がゆっくりと走っていく(写真5)。当時は荷を満載した牛車や象が行き来したことだろう。

石橋を横から眺めると、開口部は幅が狭く、スリット状の細長い形になっている。アンコール建築は、石材を多用した建造を特色としているが、不思議とアーチ構造への理解がなかった。そのため開口部は、両側から石材を長さの三分の一ほど内側にずらして迫り出して重ねていき、最後に真中で合致させる「せり出し構造」と呼

ばれる方法で作られている(写真4)。同時代のヨーロッパの石橋には美しいアーチを描いて、大河をらくらくとスパンしている例が少なくないが、建設技術に石造アーチ構造を持つか持たざるかの差、ともいえる。

開口の狭さには別の説もある。かんがい用の池の造営には多大な労力がかかるため、新しい水の確保の手段として石橋を使ったというのである。狭い開口部に板などをはめ込み水をせき止めると、石橋はダムに変身する。そうであれば開口部は狭いほうがよいわけだ。

なお、プラプトス橋へはシムリアップ市(写真6)から車で約2時間。カンボジアは未だに内戦時代に敷設された地雷が完全に撤去されていないので、石橋の周辺や川原をむやみに歩かないよう注意が必要である。

(写真: 山田耕治)

参考資料
Thierry Zephir, "Khmer - Lost Empire of Cambodia", Thames and Hudson, 1998.